

第2回 本格ミステリー

『ベテラン新人』プロジェクト選評

島田荘司

■受賞作

『砂地に降る雨』（『黒薔薇 刑事課強行犯係 神木恭子』と改題）

二上 剛

非常に達者で、推進感のある文体に、まずは驚かされた。

大阪弁の乱暴なセリフが、あちこちでへんぼんと小旗のように翻り、その行間を埋めてこれを支える文章は、暴力と長く闘ってきた男の筋肉のように、脂肪も贅肉もない。この眺め自体にまれな心地よさがあって、一読この点に心を惹かれた。

無駄がないのだが、しかし長編をじっくりと支えはじめ、やがて速度を上げて運んでいく音楽に似たその躍動には、十分にすべてがある。各事件の適切な細部描写、員面調書に似て、必要にして十分な報告、しかし、脱定型のその修飾技。必要な厳しさ、それは本物だけが持つリアリティの描出によるが、やるせなく、救いのない世界ながら、これを読み手の懐、深部にまでぐいと押し込んでくる腕力、読み手の逃げを許さない、毅然とした言い切り、しかし、傍らで絶えずこれを緩和し続ける、適量のア・センス・オブ・ヒューモア。

実体験者だけが心得る組織内の空気、用語の開陳。洒落心の欠落した、暴力世界に暮らす男たち、いささか無骨なその外観。しかし華がなくては一般読者を巻き込みきれないと見ての花の導入、そして信じられる、その女性らしい心の動き、醸される控えめな魅力。もう一輪、犠牲者となる少女の、痛々しい、しかし心動かされるたたずまい。こうしたすべての噛み合わせは、みるみる過不足のない描写に成長して、絶えずこちらを吸引する。警察小説を動かしていくために必要なすべてが上手に網羅され、しかも言い廻しはよく完成されてい

て、こちらを退屈させない。

犯罪者、警察官が、同じ穴の貉となって署の内外でどろどろと蠢くが、その犯罪性はむしろ署内部により著しく、損得勘定や、内懐に押し込めた長く激しい憤怒、積年のその忍耐が、爆発をはらんだ報応行動をもたらす。そういう一触即発の気配が入り乱れて、こちらの予想を超えた弾け方を絶えず見せながら、しかしそれは淡々と活写されて、瞠目のドラマが開始される。

この生々しさに、壁の花の位置にいて、つつましく傍観を続けていたヒロインまでもが、ついに巻き込まれ、心身ともに清かった彼女は、竜のように猛然と成長、同時に周囲のどの悪よりも猛烈に、怪物的極悪の位置にまで転落する。何故このようなことが起こり得るのか、読み手たるこちらは目を瞠りながらも、しかし解答などはどこにもないと知る。ここは、潤いなどとうに消滅した砂地であり、これこそは、おそらく作者の最も言いたかった極限的な絶望なのであろう。

救いのない事件の数々、その舞台はまさしく砂地で、読書は砂を噛むがごときであり、起こる数々の因縁の闘争は、突風が巻き上げる砂塵に似る。二十四の小娘の、ここまでの変遷、変質は、いささかりアリティを無視して見え、こちらの精神に、絶えず常識の発動を促すのだが、本物の繰り出す腕力で、黙らされてしまう。

作者がタイトルに言う「砂地の雨」は、潤いの雨としてならどこにも降らない。雨は時に骨を冷やす毒の雨として悪人どもの体を打ち、砂地は決してそれを吸い込まず、ただ表面を流れて、すみやかに消えていく。

現在、警察小説は流行のようで、次々に力のある書き手が登場しているが、真の警察小説、あるいは暴力小説とはかくあるべき、の見本のような力作が、もと大阪府警、暴力犯担当刑事から提出された。このような達者な書き手が、殺伐の暴力世界によくいたものと驚いた。

最高学歴を天衣のようにまとい、東から降臨してくるキャリア組、そしてどん底から這いあがっていく叩きあげノンキャリアとの対立を軸とする物語は、中でも人気の、一種定型とも見えている構造だが、その生々しさ、やりきれなさ、残酷さは、選者の目には、目下のところ本作が随一のように見えている。

実体験者の腕力から、大変な力作が現れたものと今は感じ、感心もしている。日本人はよくリアリティを口にしながら、実体験を持たない者の空想を批判しがちだが、この作者の筆が醸す一種の重圧を体験する時、それも一理があることと頷かざるを得ない。

こうしたわが分別の読み手に、これは是非読んで欲しいと願う、本物による、本物の警察小説である。

■優秀作

『サドン・アクセラレーション』

西 正人

これはまた、われわれ世代の自動車ファンには懐かしい道具立てで、あきらかに往年の名車、箱型スカイラインGTをモデルにしたふうの、「スカイバード」なる自動車が登場し、この日本式名車が、当時の技術屋の無理ゆえに凶器に利用されたさまを描いて、思い入れを持つ者にはある切なさを感じさせる出来映えになっていた。

プリンスのスカイラインGTは、第二回日本グランプリに参戦し、一台だけいた本物、ポルシェ904と互角に闘って、一躍伝説になった。その後継車、進化形スカイラインが、この物語に登場する市販スポーツタイプで、世界に冠たる現在の日本車を思えば、一夜の夢のような、まさしく血のにじむ黎明期の背伸びの産物で、六気筒であるのにこれを二列に割り、新たなV型のステップに進むには躊躇が湧く、そういう技術レベルの時代の作だった。

先のオリジナル・スカイラインは、エンジンの無理な大型化でボンネットを無理やり継ぎ足し、引き延ばしてロングノーズにした無骨な車で、これでポルシェ904に追いすがると夢であったが、しかしもしも追いすがれたなら、一周だけトップに立たせてくれと、ドライヴァー同士が話し合っていた演出だった。

しかしそれを知らないプリンス社員は、トップでメインスタンド前に戻ってきたスカイラインの雄姿に、感涙にむせんで総立ちになったと、当時の記録は伝える。

そののち大手と合併、市販車の心臓も六発に進化させるも、単純な直列のままなので、その左右には大きくスペースが生じ、そこを使えばある悪魔的なメカニズムをしのばせる余地も確かにある。これは、そういうわが未熟時代の因縁を引く物語である。

かつて文壇にも、この時期の自動車各メーカーの開発攻防戦を活写する産業スパイ小説が多く現れていた。先の日本グランプリも、若者がレースに熱狂しはじめ、この戦績が販売に大きく影響しはじめたので、プリンスのライバルメーカーが民間のチームに費用を流し、当時レース場では向かうところ敵なしであったポルシェ904を輸入させたと、まことしやかな噂が流れた。

この時伝説を作ったスカイラインをスターに、各車の次期デザインは若者の

関心の的で、ライバルを知ってその先を狙う他メーカーが、産業スパイを放って他社のデザインを探るといった趣向のエンターテインメントも、当時は多かった。

しかしパンチパーマと暴力威圧への強い憧れが抜けないわが民族は、最強スポーツを謳うスカイラインに、威張って見える角ばった外観から脱することを許さず、空気抵抗の大きなその箱グルマは、女性のように優美で優しい曲線を持ち、その上で強いフェラーリやポルシェの敵になることは、ついになかった。

この物語においてもまた、この無意味な日本式箱型が、犯人には奏功して、意表を衝く凶器となり得ている。流麗な低いボディにV型のエンジンを搭載していれば、この凶器はなかった。さらに言えばこの先進の殺傷技術は、日本車が欧州志向に転ずる前、長く憧れ、無批判な模倣を続けた米国商品である。ここにイソップ的な寓話性を見るのは、筆者だけであろうか。

作者は東工大の出身で、自動車部品メーカーに長く勤務した技術畑の才だが、わけでも日本車だけが雄弁に語り得る日本人論を、期せずして面白い技術小説にして見せてくれたようで、選者としては楽しく、またすこぶる懐かしい読書であった。寝ても覚めてもスポーツカーのシルエットが脳裏から離れず、眠る前には環状八号線のショールームを、夜毎端から端まで巡らなくては寝つけなかった、あの懐かしい時代を思い出させてもくれた。

作者の経歴が、細部の説明に説得力を与え、また加藤のような、飄々とした魅力の技術屋を出現させてもいる。会社勤務の過去を反映してか、特定の人物に突出した魅力を与える手法は避けているが、個人的には今回は、この加藤を主軸にした物語を読みたい気分にもなった。

また、この世代の特徴のように思うのだが、男女をまじえた中学生グループの団結のドラマも、ずいぶん懐かしかった。当時は一人きりの長い時間を要求するゲームはなく、街には空き地がいたるところにあり、塾に行くくらいしか子供の束縛はなく、その習慣もまた、放課後友人と集まるきっかけになった。夕陽の色と、夕餉の香りとともにある、あれこそは懐かしい時代の記憶である。